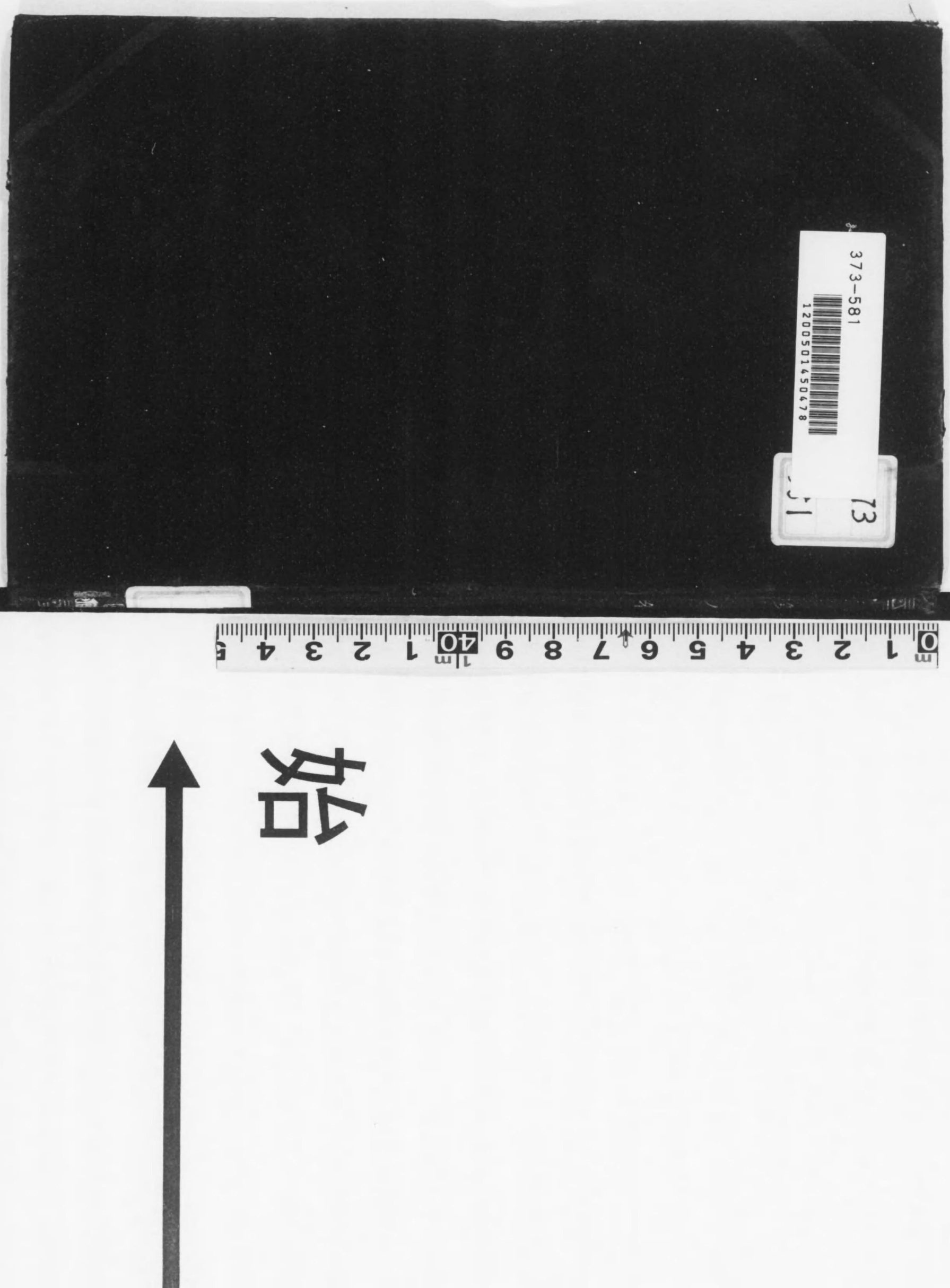

373-581
1200501450478
73
部

磨歌

井上和雄編

高見澤版

浮世繪標準畫集

磨歌

井上和雄編

浮世繪標準畫集

第八卷

昭和 帝國圖書館藏 三

373-581

歌麿目次

井上和雄

本文「歌麿の焦點」

一圖　婦女人相十品　手紙を見る女房（雲母地大判）（木版彩色手摺）
二圖　夏姿二美人（大判）
三圖　水茶屋女（大判）
四圖　六玉川・撫衣（大判）
五圖　浴後對鏡（大判）
六圖　螢狩（大判三枚續）
七圖　霞織娘雛形（大判）
八圖　難波屋おきた十八歳の姿（大判）
九圖　千代鶴の女（大判）
十圖　難波屋おきた（雲母地大判）
十一圖　難波屋おきた瀬川菊之亟（大判）

十二圖　富本豊孃（黃地間判）
十三圖　當時三美人（雲母地大判）
十四圖　高島おひさ（兩面摺細判）
十五圖　風俗浮世八景・かこはれの夜雨（間判）
十六圖　對鏡二美人（黃地大判）
十七圖　ロベに（黃地大判）
十八圖　娘日時計・申ノ刻（黃地大判）
十九圖　青樓十二時・辰ノ刻・巳ノ刻（黃地大判）
二十圖　炊事美人（大判二枚續）
二十一圖　北國五色墨・川岸（黃地大判）
二十二圖　當時全盛美人揃・若鶴（黃地大判）
二十三圖　農婦（大判）
二十四圖　青樓七小町・瀧川（大判）
二十五圖　錦織歌麿形新模樣・煙管を持つ女（黃地大判）
二十六圖　婦人泊り客之圖（大判三枚續）
二十七圖　兩國橋下の涼み（大判三枚續）
二十八圖　あはび取り（大判三枚續）
二十九圖　婦人手業拾二工・髮すき（大判）
三十圖　山姥と金太郎（大判）
三十一圖　行水の母子（大判）
三十二圖　母に戯るゝ子供（長判）
三十三圖　蚊帳の內外（大判）
三十四圖　糸屋小いとが相（大判）
三十五圖　婦人相學拾體・齒を染むる女（大判）
三十六圖　婦人相學拾體・文を讀む女（大判）
三十七圖　美人面相拾體之圖・肌ぬぎの女（大判）
三十八圖　吹分ケ言葉の花・かゝア（大判）
三十九圖　岩井半四郎と市川八百藏（大判）

四十圖　市川男女蔵と中山富三郎（細判）
四十一圖　市川五粒名残り惣役者發句集（畳摺大判）
四十二圖　畫本蟲撰（大本）
四十三圖　百千鳥狂歌合後篇（大本）

歌麿の焦點

井上和雄

喜多川歌麿は、寶暦二癸酉年に生れた。源姓、北川（後に喜多川）氏、名は信美、幼稱市太郎、後に勇助と稱し更に勇記と改めた。一説に據れば、武州川越の產で、早く父を失ひ、少年時代に母と共に江戸に移つたのであらうと云ふ。夙に鳥山石燕に師事して深く師に愛せられた。

初め畫名を豐章と云つたのは、師の畫名豐房に因んで名乘つたものであらう。それを歌麿と改めたのは、天明二年即ち彼れが三十歳の時であつた。別に師號に因みある石要、木燕、燕岱齋などの號もあり、また艶めかしい紫屋といふ號をも用ゐた。まれに狂歌を詠む場合には筆の綾丸と戯稱した。住所は忍ケ岡、神田久右衛門町、馬喰町三丁目、神田辨慶橋等を轉々したが、其の間版元蔦屋重三郎方に寄寓したこともある。此の蔦重は天明三年九月に吉原五十間道から通油町に引移つた。彼れはそれ以前から、蔦重とは知り合つて居たが、此時以來一層親密の度を加へ、遂に蔦重の家に

寄寓することゝなつたらしい。それは、天明七年版の『麥生子』といふ狂歌本に一圖を畫き、卷末に「鎌倉近人は分て予と交り深かりし故此集にもれん事をうれひおくれはせの尻馬にむち打つてともによろこびを述る。病ひ氣は驛路の鈴の音なれやからりと今はよくなりにけり。蔦の本の歌麿」と記して居るのを見れば、蔦の本即ち蔦屋の許に於けるといふ意味で、寄寓のことを裏書するに足りる。

彼れの處女作に近いものとしては、安永五年（廿四歳）十月出版の「市川五粒名殘り惣役者發句集」と題する一枚摺に、市川海老藏（四代目團十郎）の肖像を描き「北川豐章書」と落款したものが遺存して居る（四十一圖參照）。それに次で、安永七年（廿六歳）十一月五代目團十郎が「荒川太郎まけず」に扮した「暫」の圖（細繪）があり、翌安永八年には、黄表紙『都見物太郎』及び洒落本『女鬼產』の挿繪を畫くなど、彼れの畫壇進出は次第に熱を加へて來た。

安永後半期から天明初期へかけての彼れの畫風は、謂はゞ海のものとも山のものともつかず、あれ程天才肌の彼れとしては、決して早熟の方ではなかつた。それが天明四五年頃となつては、流石に後年の彼れを豫想せしむるに足る才筆を示したとは言へ、まだどことなく先輩重政及び清長などの感化の跡をとゞめて居た。が、それも束の間で、天明六年（卅四歳）の『繪本江戸爵』や、其頃の錦繪に現はれた彼れの畫風は、相當變化を示したのみならず、其の製作率は益々矢つぎ早になつて來た。彼れが美人畫家として、周圍から注目し始められたのも、先づ卅三四歳たる天明五六年頃からの事と思はれる。

天明八年（卅六歳）に出した『繪本蟲撰』は、實に彼れの眞面目を窺ふに足るものであつて、其の描寫の精緻驚くべきものがある（四十二圖參照）。此の一書を手にすれば、彼れが女性美を觀察する場合も、如何に纖細に神經を働かせたかを想像することが出來る。それと好一對を成すものは、寛政初めに出した『汐干のつと』及び『百千鳥狂歌合』である（四十三圖參照）。兩書とも精密なる寫生圖を以て充たされて居る。またその前年（天明八）の出版で『繪本歌まくら』といふ秘戲圖は、彼れの類書中に於ても嶄然群を抜くものであつて、彫摺の技巧と共に永く後世に傳へらるべき代表作である。

寛政二年（卅八歳）版の『繪本吾妻遊』と『繪本駿河舞』とは、所謂歌麿型を完全に具備した標本と見るべく、稍下ぶくれのした顏は、彼れの想化に成れる美人型である。こゝで若し彼れの美人

型を二つに分けるならば、此の下ぶくれ型を前期の特徴とし、かの瓜核式のものを後期の特徴とすべきであらう。

寛政四年（四十歳）は、彼れの家庭上に何か出來事があつて、それが作畫上にも一つの轉換期となつたのではあるまいかと想像される。こゝに累積されたる彼れの畫技は、いよ〳〵高潮期に近づき、作畫熱は益々其の度を加へ來つたのであつた。

二

寛政五年（四十一歳）には、彼れは盛んに雲母地の錦繪を發表した。例へば「婦女人相十品」とか「婦人相學十體」とか、又は「小伊勢屋おちゑ」とか「難波屋おきた」とか、いづれも半身像の美人畫である。こゝに一つ注目すべき事は、彼れの美人型に一新例を作つて居ることである。それは、假りに「おきた型」とでも稱すべく、寧ろおきたの生寫しと見るべき特徴を具へた美人型である。試みに「難波屋おきた」の一圖を見れば、高島田に結つた少女の眼は尻上りに長く引き、小鼻の邊で一寸隆起した貴族風の鼻、口もとはキリツと緊つて、どことなく冒し難い上品さを具へてゐる（十圖參照）。これが、ひどく彼れの氣に入つたものか、其頃の美人畫には、折々斯樣な類型を示したものがあり、現に「おちゑ」なども「おきた型」に類するものである。

當時江戸で人氣を沸かして居た水茶屋女のうちには、おちゑ、おきた、おひさの三人は殊に評判が高かつた。就中、おきたに對して彼れは淺からぬ愛着を感じたらしい。藝術家に通有の情熱的な態度を、彼れは一層强くおきたに現はしたであらう。彼れの筆に成れる「おきた」は、雲母地に黃ツブシに幾種類となく矢つぎ早に發表された。それによつて、彌が上にも兩人の評判が高くなつた。恐らくは、當時の壁のむだ書きに、おきた歌麿を相合傘にした位の實例はあつたことゝ想像される。

さり乍ら、歌麿は四十一歳の分別盛り、おきたは幾歳か、それに就て唯一の手がかりとなるものがある。當時江戸市中を呼び賣りした一枚摺の評判記に『水茶屋百人一笑』といふのがあつて、其の二三を拔萃して見ると左の如きものである。

天智天皇　　淺草馬道　　難波やきた十六

秋の茶をのんで茶のぜにおきたとて
かねばこむすめかくれなにはや

持　統　天　皇　　兩國米澤丁　　高島ひさ十七

春すぎて夏ぞすゞしき水茶屋の
　名も高しまのおひさうつくし

中納言家持　　木挽町四丁目　　こいせやちゑ十八

かさゝぎの橋うちわたりこびき丁
　おちゑがくむ茶のみに小いせ屋

僧正遍昭　　品川入り口　　平野屋せよ十七

あまつ風雲に平野やふきとぢよ
　おせよがすがたしばしとゞめん

たゞこれだけでは、何年に出たものかは不明であるが、幸ひにも欄外に「寛政五癸丑年八月廿九日求」云々「江戸中大ひやうばんと賣歩行」云々なる墨書があつて、それを寛政五年版と認むるに矛盾は無いやうであるから、歌麿の四十一歳に對して、おきたは花恥かしき十六歳の美少女であつた事は確かである。恰もお半長右衛門もどきであるが、また別の趣に於て對照の妙味がある。

難波屋おきたに就ては、まだ〳〵語り草が盡きないが、特に一つ擧げて置きたいのは、寛政七年に彼れの筆に成れる全身圖の大錦で、おきたが小屏風の前で埋れ火をかきならして居る狀を畫き、火鉢の傍らには艶書らしい手紙を畫き添へてあるもの。畫面の右肩に判じ物があるので、一層意味深長となる。曰く「鼠の聲ににごりをうち鯽をたいしたる虫」即ち十八。傍らの繪判じは「朝顏も難波屋おきた崩されず」とでも解すべきか、要するに朝顏大盡とか渾名された男が、おきたを說き伏せやうとして、度々熱情をこめた手紙を寄越したにも拘らず、おきたが容易に應諾しないといふ意味を現はしたものである。併し、十八の娘盛では、とつ追ひつ思案に暮れて居るのも無理はない（八圖參照）。

前記の評判記にも見ゆる通り、兩國米澤町に高島おひさといふ娘が居て、難波屋おきたと妍を競つたのであるが、年はおきたに一つ上で、寛政五年に十七歳であつた。此のおひさも亦彼れの錦繪に屢ば取扱はれて居り、寛政五、六、七の三ケ年に亘つて、おきたと數の上でも競爭して居る。一例として細判兩面摺の全身圖を擧げて見る。これは「難波屋おきた」と「高島おひさ」の二圖限りであつて、兩圖とも一紙兩面に摺り、前と後を巧みに寫實風に描いたものである（十四圖參照）。

水茶屋女の外に、藝妓で有名な富本豐雛も畫かれて居るが、これはおきた、おひさの例に較べて甚だ少數である。例へば、手紙を持つ半身圖（雲母地）とか、筆を持つ半身圖（黃地間錦）とか、「當時三美人」と題して、おきた、おひさと共に豐ひなを取合せた半身圖（雲母地）とか（十二圖・十三圖參照）、其他に一二を數へるに過ぎない。

三

寛政六年から七年へかけては、男盛りの四十二三歳といふ點からも、彼れの畫道精進はいよ〳〵脂が乘つて來た。此の二年間は、彼れの錦繪の上に於て黃ツブシ全盛時代と稱し得る程、それ程黃ツブシを多く使つて居る。先づ組物で例を擧げるならば、青樓十二時、娘日時計、北國五色墨、當時全盛美人揃、等いづれも皆黃ツブシである。黃ツブシの例は榮之に最も多く見受けるが、それは一種の氣品を加へる點に効果があるやうである。

彼れは「青樓十二時」に於て、遊女生活の一晝夜を、心憎きまでに行屆いた筆で描寫して居る（十九圖參照）。こゝに至つて、彼れが昔日の遊蕩三昧も無駄ではなく、其の經驗に燻しをかけて、渾然たる藝術境に踏み入つて居る事は、何としても彼れの偉大さを物語るに足るものである。流石に年

のせいか、すべての觀察が鋭く要領を掴んで居る。例へば「北國五色墨」の「てつぽう」にしても「川岸」にしても、尋常一樣の者では到底眞似も出來ない所である（廿一圖參照）。また「當時全盛美人揃」の一組は、其の題にも因みある如く、彼れの全盛を記念する唯一の美人揃であらう。その内ち丁子屋の雛鶴といひ、玉屋の花紫といひ、兵庫屋の花妻といひ、或は若松屋の若鶴といひ（廿二圖參照）、よくも斯う變化を示す事が出來たものだと、つく〴〵感心させられる。

寛政七年頃の作品中「娘日時計」十二枚一組は、顏の輪廓其他の線を肉色摺にした點に特色があり（十八圖參照）、二枚續の「炊事美人」は、竈の部分に銅紛を摺り込んだのが、新しい試みである。斯樣に技巧上に種々苦心を費やした歌麿は、此の年（寛政七）を以て美人畫に於ける最高潮期に達したものと謂ふことが出來る。それから、歌麿の畫壇生活三十年のうち、其の情熱的天分を作品の上に最も著しく發揮したのは、寛政五、六、七の三ケ年即ち、彼れが四十一歳より四十三歳に亘る期間である。

おもふに、生理的方面から觀察しても、彼れの精力が最も充實して、女性美に對する心理作用が極度に緊張した事は、察するに難くない。同じく歌麿に畫かれたとは言へ、此の三ケ年間に彼れの

錦繪と成つた女は、世にも幸福な女である。

此の期間の初め即ち寛政五年に出た雲母地のものでは「婦女人相十品」若くは「婦人相學十體」の組が最も優れた出來である。前者の組では、ボツビンを吹く娘、煙草を吸ふ女、日傘を翳す盛裝の女、手紙を見る女房（一圖參照）などがあり、後者の組では、團扇を持つ藝妓、指折り數ふる女、鏡を持つ丸髷女、手拭を絞る女などがある。

寛政七年頃の彼れの錦繪中に「高名美人見たて忠臣藏」と題する十二枚一組のものがある。それは當時江戸で著名の水茶屋及び料理屋などの女を、劇中の人物に見立てゝ面白く取合せたのであるが、中に第十一段目の圖には三美人と男一人を畫き、圖中の柱に「應求哥麿自艶顔寫」と記してある。これを見ると、彼がノロケ半分に自畫像として、色男然たる男を畫き添へたものと解せらる。

彼れのおノロケは、右の一例のみには止まらないらしく、其頃の秘戲圖中にも所謂樂屋落ちの文句を散見することがある。併し、それ等は洒落半分の自畫自讃であるが、外に彼れの眞面目を吐露したる自讃の句が數例ある。以下、それを列擧して見やう。

四

寛政七八年頃からは、彼れの作品中に折々自負を示した例を見受ける。先づ、落款の肩に「正銘」の二字を加へて居る。これは歌麿類似の版畫に對する自家防衛の意味から用ゐたものと察せられる（廿三、廿四圖參照）。其の銘正銘を主張する彼の精神は、次に掲ぐる二三例によつても、よく推察することが出來る。

第一、「錦織歌麿形新模樣」煙管を持つ丸髷女。

「夫レ吾妻にしき繪は江都の名產なり然ルを近世この葉畫師專ら蟻のごとくに出生し只紅藍の光澤をたのみに怪敷形を寫して異國迄も其恥を傳る事の歎かはしく美人畫の實意を書て世のこの葉どもに與ることしかり」（廿五圖參照）

第二、『錦織歌麿形新模樣』裲襠（うちかけ）を着たる遊女。

「筆意の媚うるはしく墨色の容顔たをやかなればたとへ麁畫のつゞれ草筆の素裸を畫とも予が活筆は姓姉なりまた紅藍紫青の錦をまき紅粉にてかの不艶君を塗かくせども唐畫の淺ましさには日追て五體の不具を顯し其情愛をうしのふにおよぶ依て予が筆料は鼻とゝもに高し千金の太夫にくらぶれば辻君は下直なるものと思ひ安物を買こむ板元の鼻ひしげをしめす」

第三、「錦織歌麿形新模様」團扇を持つ若き女。

「凡美人を畫に見寸身と云事有は唯容愛と美相のふたつなりされば面作うつくしく媚に愛を含すればおのづから覽人の心動きまた形嬋娟にして風情有時は人情傳染するものなりねがはくば予が筆意の艶と不具のうつし繪とて猶諸君子の貴許ヲ傳」

また「五人美人愛敬競」の内、繪判じで「兵庫屋花妻」と讀める大首の女が持つて居る手紙に、

「人まねきらいしきうつしなし自力畫師哥麿が筆に御面さしを認めもらい參らせ候へばこひしき節は御見の心にてながめ參らせ候さながら御面かげのごとく心うごき參らせ候て誠に美人畫は哥子にとゞめ」

と自讃してゐる。

併し、嚴密に言ふと、此の當時の作品は、描線に稍や硬い感じが伴なつて居る。寛政八年頃の「六玉川」なども其の一例であるが、擣衣の一圖（四圖參照）は、硬いなりにも非常にスッキリした特色がある。

寛政九年頃には、有名なる「あはび取り」の三枚續（廿八圖參照）を出して居る。これには身體の線に肉色を用うるなど、工夫を凝らした跡が窺はれるのみならず、裸婦の姿は、モデルを使つたのではあるまいかと思はれる位、生き〳〵した肉感が盛られて居る。

彼れが、女性の動作表情に就て微細の點まで注意を拂つたことは、「婦人手業拾二工」の内「髪すき」の一圖にも現はれて居る（廿九圖參照）。

蠱惑的な感じを與へるものとしては「山姥と金太郎」に數圖がある（卅圖參照）。これは、彼れが母性愛に注目した實例とも見られるが、それ以外に、日常家庭に於ける母子の關係を題材にしたものがある（卅一、卅二圖參照）。これ等を見ても、あどけなき兒童心理に對して、彼れは實に纖細な神經を働かせたことが判る。

斯くて、寛政の末は彼れの精力も遞減して、作品の上に優劣の差を著しくするやうになつた。次の享和期に入つて、若干特色を有する作品を出したが、それにしても、昔日の生氣撥剌たる美人畫と比較するには、あまりに貧弱な感じがする。

五

享和元年（四十九歳）頃の作「婦人相學拾體」數圖（卅五、卅六圖參照）は、際間の無い出來榮

えである。それをキツカケに、享和二年頃には「美人面相拾體之圖」があり(冊七圖參照)、翌三年頃には「咲分ケ言葉の花」數圖がある(冊八圖參照)。また同年頃の「教訓親の目鑑」數圖は、女性の表裏を觀察して、よく其の特色を摑んで居る。

享和三年八月、市村座の「桂川續月見」の二番目「道行」の場面に於ける、岩井粂三郎のおはん市川八百藏の長右衞門を畫いた圖がある(冊九圖參照)。これは似顔繪ではなく、彼れ獨特の想化に成れるものであるが、其の事に就て彼れは畫面に斯う記して居る。

「予が畫くお半長右衞門はわるくせをにせたる似づら繪にはあらず中車は美男の家なり粂三郎は當時の娘がたなりいづれ兩人のうつくしき舞臺かほとかはゆらしき風情とを畫て誠に江戸役者の美なるをとづうら〳〵までもしらせまほしくいさゝか筆を述るのみ」

併し乍ら、彼れは曾て役者似顔繪に筆を染めたことがあり、既に寛政年間には「役者六家選」といふ細繪三枚續、市川男女藏と中山富三郎の細繪(四十圖參照)及び、山下金作の細繪などがある。尤も彼れの豐章時代に、役者似顔繪のあることは、本篇の初めにも述べた通りである(四十一圖參照)。

文化元年(五十二歳)彼れは「太閤五妻洛東遊觀之圖」(三枚續)を畫いて刑に問はれ、心身共に非常な打擊を受けてそれが遠因となり、翌々三年九月二十日、五十四歳にして歿した。法名を秋圓了敎信士といひ、淺草北松山町なる專光寺(淨土宗)に葬つた。

一代の巨匠歌麿も、晩年の落莫たる心境を察すると、そゞろに哀愁の念さへ伴なふやうである。まして、彼れが華やかなりし寛政中期の時代を想ふと、あまりにも懸隔の甚だしいことに驚かされる。

附「歌麿繪本概目」

繪本時津風、	一冊	天明二年
繪本江戸爲、	三冊	同六年
和歌夷	一冊	同六年
繪本詞の花、	二冊	同七年
繪本蟲撰、	二冊	同八年

繪本歌まくら、　一冊　同八年
繪本譬喩節、　三冊　同九年
繪本狂月望、　一冊　寛政元年
汐干のつと、　一冊　同元年？
百千鳥狂歌合、　二冊　同二年？
繪本普賢像、　一冊　同二年
繪本銀世界、　一冊　同二年
繪本吾妻遊、　三冊　同二年
繪本駿河舞、　三冊　同二年
繪本四季の花、　二冊　同十三年
吉原青樓年中行事　二冊　享和四年

（終）

（一圖）

頃年五政寛（判大地母雲）房女る見を紙手　品十相人女婦

（圖二）

夏姿二美人　（大判）寛政七八年頃

（三圖）

水茶屋女（大判）寛政六年頃

（四圖）

六　玉川きぬた（大判）寛政八年頃

（五圖）

浴後對鏡（大判）寛政七八年頃

（圖　六）

寛政七八年頃

蛍　狩　（大判三枚續）

（七圖）

霞織娘織姿（大判）寛政七年頃

（八圖）

雛波屋お きた十八歳の姿（大判）寛政七年

難波屋お きた（雲母地大判）寛政五年頃

千代鶴の女（大判）寛政七年頃

（十　二　圖）

頃年六政寛（判間地黄）雛豊本富

（十　一　圖）

頃年六政寛（判大）丞之菊川瀬・たきお屋波雛

（十　四　圖）

高島お ひさ　（兩面摺細判）　寛政五年頃

（十　三　圖）

當時三美人　富本豐雛・雛波屋お きた・高島お ひさ　（雲母地大判）　寛政六年頃

（十　六　圖）

頃年七政寛（判大地黄）人美二鏡對

（十　五二　圖）

頃年七政寛（判間）雨夜のれはこか　景八世浮俗風

（十七圖）

頃年七政寛（判大地黄）に　べ　口

（十八圖）

頃年七寛政（判大地黄）刻ノ申　計時日娘

（圖　九　十）

青楼十二時　辰ノ刻・巳ノ刻　（黄地大判）　寛政七年頃

（圖　十　二）

炊事美人　（黄地大判　二枚續）　寛政七年頃

(圖 二 十 二)

頃年七政寛（判大地黄）鶴若内屋松若　揃人美盛全時當

(圖 一 十 二)

頃年七政寛（判大地黄）岸　川　墨色五國北

（二十四圖）

頃年八七政寛　（判大）　川瀧内屋扇　町小七樓青

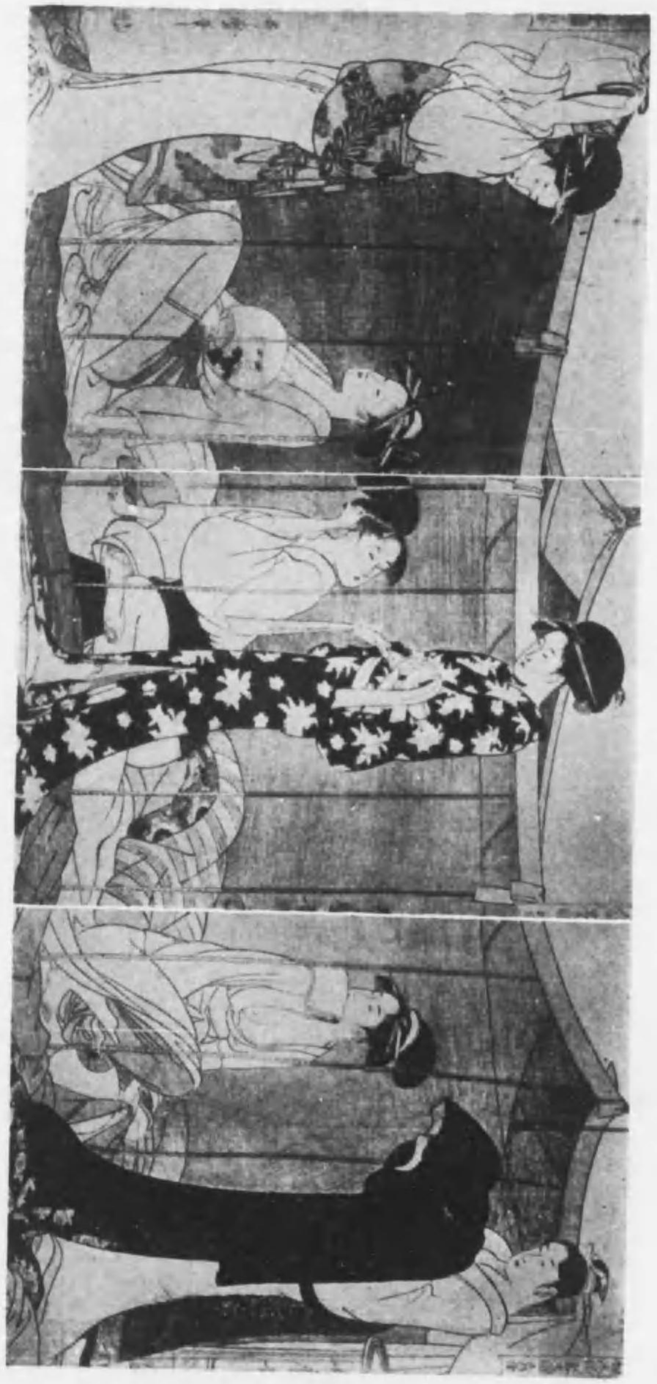
（二十三圖）

頃年八七政寛　（判　大）　婦　農

（圖五十二）

錦織歌麿形新模様　煙管を持つ女（黄地大判）寛政七八年頃

（圖六十三）



寛政七八年頃　（續枚三　判大地黄）　圖之姿り出人婦

（圖　七　十　二）

兩國橋下の涼み　（大判　三枚續）　寛政八九年頃

（圖　八　十　二）

あはび取り　（大判　三枚續）　寛政九年頃

（二十九圖）

婦人手業拾二工　髪すき（鼠地大判）寛政九年頃

（三十圖）

山姥と金太郎（大判）寛政十年頃

（三十二圖）

母に戯るゝ子供（長判）寛政十一年頃

（三十一圖）

行水の母子（大判）寛政十一年頃

（三十四圖）

糸屋小いさの相　（大判）　寛政十二年頃

（三十三圖）

蚊帳の内外　（大判）　寛政十二年頃

（圖 六 十 三）

頃年元和享（判大）女七讀ゑ文　體拾學相人鯨

（圖 五 十 三）

頃年元和享（判大）女るも染ゑ齒　體拾學相人鯨

（三 十 七 圖）

美人面相拾體之圖　肌ぬぎの女（大判）享和二年頃

（三十八圖）

頃年三和享（判　大）アヽか　花の葉言け分咲

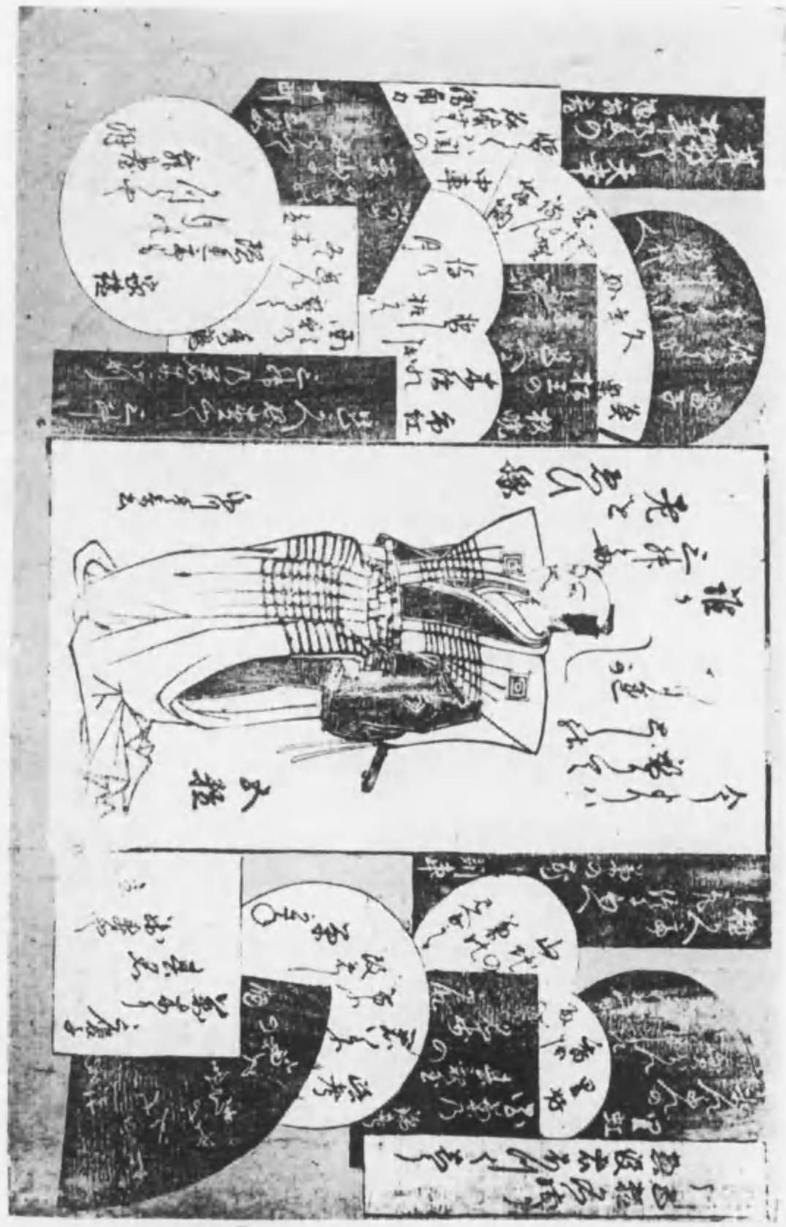
（三十九圖）

（判大）　門衛右長の藏百八川市と半おの郎三粂井岩

演所『見月繼川桂』座村市　月八年三和享

圖十四

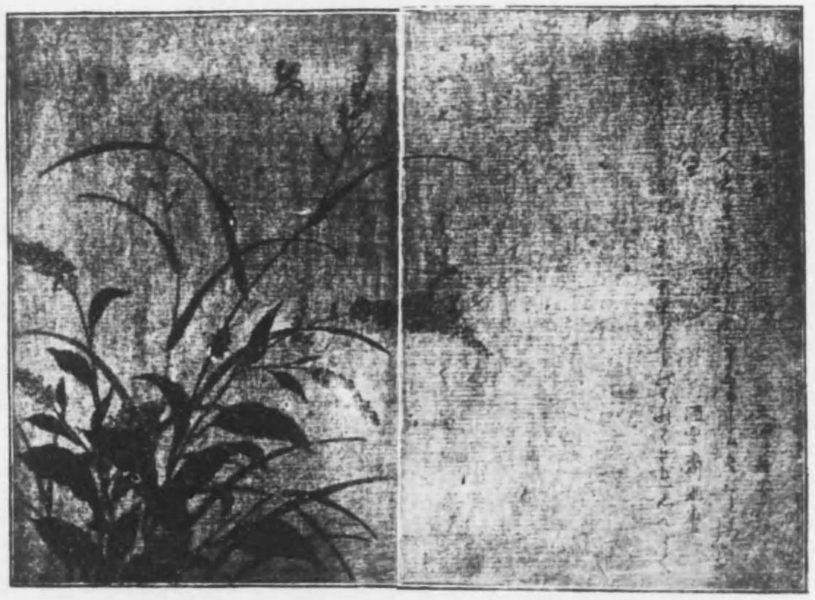
市川男女蔵と中山富三郎　寛政七年頃　（細判）



圖一十四

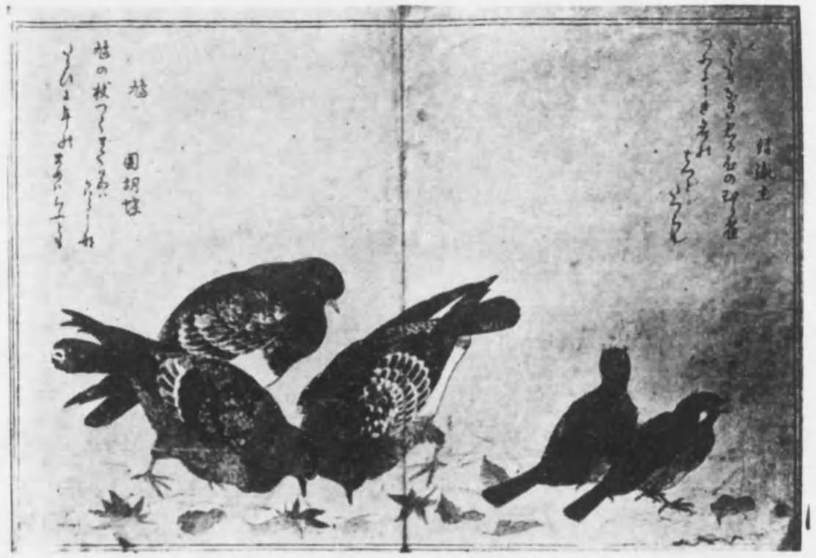
月十年五永安　〔物語判大・款落章像　集句賛者役懇り愛名粗五川市

（圖二十四）



画本蟲撰　（大本二冊）　天明八年

（圖三十四）



百千鳥狂歌合後編　（大本一帖）　寛政二年頃

浮世絵八標卷第
準歌麿畫集

昭和七年三月廿六日 印刷
昭和七年四月一日 發行

限定版 定價 五十錢

版行

編纂者 上村益郎
高見澤忠雄

東京市外中野町城山八番地

發行者 上村益郎

東京市外中野町上原二八番地

木版印刷 高見澤木版社

之印

發行所 高見澤木版社出版所

東京市外中野町城山八番地
電話中野四五四八番
振替東京二九五七五番

東京
高見澤木版社
刊行

373
581

終